

朴趾源の「両班伝」に見る 朝鮮社会の身分構造のパロディ

ケネス・ロビンソン

『両班伝』は、十八世紀後半の朝鮮で書かれた作品である¹⁾。著者の朴趾源（1737-1805年）は、当時の社会に現われていた社会身分の流動性を利用し、朝鮮社会で法律上、社会身分がもっとも高い両班を批判した。朴趾源自身も両班の一人で、高名な氏族の出身でもあった。この作品から、当時の家族制度、身分制度、科挙制度が相互に関連しており、商人の社会身分には流動性があったということがわかるが、朴趾源が生きていた時代には、父が両班であっても、母が両班でないだけで、法律上は両班と認められない庶孽にとって、社会身分の流動性がないことを批判していると思う。つまり、この短編は、朝鮮後期、特に十八世紀後半からの商人の流動性を使って、教養のある親戚も含めた人々に対する身分構造の硬直性と両班層の排他性をパロディ化しているようである。

『両班伝』の内容を理解するため、朝鮮の身分構造を説明する必要がある。朝鮮王朝時代には、身分制度、家族制度、科挙制度は深く相互に関連していた。家族制度は、中国の宋時代に活躍した朱子の儒教学に基づいたもので、朝鮮で十六世紀後半に全国的に定着したと言われている。一方、科挙制度は、最高試験である文科に資格を持つ男性の数を制限するよう、十五世紀中期までに構築された。科挙制度の詳細を説明する前に、身分制度を紹介する。

朝鮮社会では、身分が両班・良人・賤人に分かれていた。細かく見れば、良人が庶孽・中人・郷吏に、賤人が賤民・奴婢に分かれていた。身分は、法律上、生まれた母の身分を受け継いだものであったが、例外が一つあった。それは、父が両班、母が奴婢の場合には、子供は奴婢にならないということである。法律を決める両班層は、その子供を奴婢ではなく、良人とすることにした。これは、十五世紀中期からの法律であった。

この身分制度は、家族制度と深く関わっていた。朝鮮王朝と両班は、科挙に挑戦する人員を制限するために家族制度を利用した。文科に合格して中央政府の官僚になった両班は、普通、ソウル地域と家郷の両方に土地を持っていた。両班の第一の妻は、同じ両班層の家族の娘であった。母が両班層である場合、父も両班層であった。この二人の間に生まれた子供たちは、両班身分を受け継ぎ、結婚相手も同じ両班であった。両班の男性の第一の妻、または、両班の女性の夫は、両班より下層の人ではないことが理想であったが、家庭が貧困に見

舞われた場合、両班身分ではない相手と結婚せざるをえないこともあった。

両班男性の多くは、複数の女性と結婚した。両班の女性との結婚後、他の妻とどの順番で結婚したのか、族譜に両班出身以外の妻が記録されていないため明らかになっていないが、庶孽身分の妻がいる場合、その子供は庶孽となった。身分によって、科挙を受験する資格が異なった。奴婢には、受験資格がまったくなかった。庶孽には、1471 年ころから文科と武科の受験資格がなかったが、下記に説明するとおり、1553 年から文科と武科の受験資格が与えられた。しかし合格しても、身分のため昇格は下級官職止まりであった。庶孽の昇格については、後ほど取り上げる。中人は、雑科という政府の専門職部門の試験にしか受験資格がなかった。文科を合格した両班だけが、上級官職、特に正三品以上の堂上官官職まで昇る特権を握っていた。

以上三つの制度の紹介を簡単にまとめると、身分は生母から受け継ぎ、科挙試験の資格は身分によって異なり、文科で登科した庶孽には昇格のうえで制限があり、官僚としてのキャリアに壁があった。

以上の背景をふまえて、『両班伝』の内容を紹介する。『両班伝』が描写する時期は明確ではないが、朴趾源が 1737 年に生まれ、1805 年に亡くなったことから考えれば、十八世紀後半ではないかと思われる。物語の舞台は、江原道の南部にあった旌善郡である。そこに、経済的に困窮していた両班の男性とその家族が住んでいた。この両班は文科に合格しなかったのか、あるいは受験しなかったのか、ふれられていない。旌善郡は、国都の漢城から離れた地域で、江原道西部の農業地域からも離れていた。

『両班伝』では、この両班はソンビ(선비)と記されている。「ソンビ」とはある種の両班を示す名称で、中央政府で働かず地方で生活し、儒学を中心に勉強を続けた。しかし、このソンビは、広い土地を所有せず、米を栽培する田もなく、貧乏であった。その地方の官僚達は彼を尊敬していたので、米などの食物を貸していた。しかし結局、彼には借りた米の返済が無理であった。これを聞いた江原道の観察使は、ソンビを逮捕することを命じた。旌善郡の郡守は困っていた。(郡守とは旌善郡を統治する官僚で、現役の官僚の中から国王によって任命、派遣される。)

ソンビの村には裕福な商人が住んでいた。その商人は、ソンビが逮捕されることを聞き、彼を助けようと考えた。その理由は、裕福であるのに両班ではないために、土下座をしなければならなかったり、馬鹿にされたりすることに、すっかり嫌気がさしていたからであった。商人はソンビの家に行き、借米の返済の肩代わりとソンビの両班身分を引き換えにすることを提案した。ソンビは賛成した。

商人はすぐに郡守のもとへ行き、借米を払った。郡守がその後ソンビを訪ねたところ、ソンビは両班ではなく良人のように挨拶した。それを見た郡守は商人が何をしたかが分かり、商人の両班身分を確認して法的に認めるため、儀式を行うことを命じた。郡守は、儀式で両班の生活の条項を読み上げた。

『両班伝』によれば、その条項は下記のものであった。

常に五更には起き、燈を点し、眼ざしは鼻の頭あたりに置き、必ず正座をして、『東葉博議』のような雑解な文章も、氷の上にかぼちゃを転がすごとくすらすらと読むこと。

ひもじさと寒さに耐え、貧しきことなぞこぼすべからず。

がたがたと齒を鳴らしたりしてはいけない。

咳は小さくして、痰はこれを飲み下すこと。

衣冠をつけるときは、袖でもってぱたぱたと塵芥を払って埃波立たせること。

洗面をするときはごしごしと拳を擦ることなく、齒を磨くときはうがいをはがらさずべからず。

婢を喚ぶときは、声を長く延ばして鷹揚げに喚び、歩はゆるりとして、履物は引きずるようにすべし。

そして、あの『古文真宝』や『唐詩品彙』のような本を鈔写するときは、荏つぶほどの大きさにし、一行に百字とすべし。

錢を手にはせず、米の値段を聞くべからず。

いくら暑くとも、足袋を脱がず、冠をつけずに食膳に向かふべからず。

食事をするときは、羹（肉汁）を先にすすってしまわないように、すするときはスルスルと音をたててはいけない。

箸を置くときはコトコトと音をたててはいけない。

生ねぎを食して口を臭くしてはいけない。

濁酒を飲むとき、口ひげについた雫をすすってはいけない。

煙草は両頬がくぼむほどに吸い込んではいけない。

いくら腹が立っても妻を殴ったりしてはいけない。腹が立ったからといって、器物などを蹴飛ばしたり壊したりしてはいけない。

拳でこどもを打ってはいけない。

奴婢に過ちがあっても折檻することなく、牛馬を叱り付けるに、もとの売り主に対してとやかく言ってはいけない。

病にかかっても、巫を呼んだりしてはいけない。

祭祀を行なうのに、坊主を招いて念仏をとえさせてはいけない。

いくら寒くても、火鉢に手をかざしてあぶってはいけない。

人と話すときは唾をとばさず、家畜などを屠さず、賭ごとなどはもつてのほか。²⁾

郡守はさらに続ける。「これらすべての起居動作のうち一つでも違反すれば、両班はこの証文を持して、役所に出向き、即刻正さなければならぬ。」

しかし、両班になったばかりの商人は、条項を聞いて、とても耐えられないと思った。群

守が読み上げた条項、つまり、両班がしなければいけないことがあまりにも大変そうなので、両班身分への変更をやめた。

多くの研究は、『両班伝』が、両班の生活や傲慢さを風刺していることを強調している。その解釈を踏まえて、『両班伝』の内容を中心に、十八世紀後半の科举制度を考えたい。1553年に新しい法律によって、庶孽は、文科や武科を以って官僚になることが許されたが、生母の身分を証明する必要があった。文科や武科に登録をすれば、庶孽であって、賤人ではないことを国家が調査の上に作成した戸籍（国家の役税記録）を証明として提出しなければならなかった。また、試験の公用書類には、庶孽であることが記されていた。一方、両班に関しては公用書類に身分が記されていなかった³⁾。言い換えれば、両班なので、記す必要はなかった。

朴趾源は、科举試験に合格しなかったが父が高官であったので、中年になるまで家族は財政的には苦しんでいなかった。朴趾源は教師であった。庶孽身分を持って高く評価されていた学者である朴齊家（1750-?年・号は楚亭）や李德懋（1741-1793年・号は炯庵）などの実学者が親友であった。朴齊家は実力が認められ、清朝中国に派遣された1778年の謝恩使や1790年の進賀使（合わせて四回）に参加した。1779年に朝鮮王朝の奎章閣という史料室と図書室に勤めることとなり、1794年に武科に登科、官職に任命されて縣監という文官ポストまで上昇された。李德懋は、朴齊家と同様に、1778年に使節団のメンバーの一人として中国に赴き、1779年に奎章閣に任命された。また、『蜻蛉國誌記』という日本に関する重要な参考書を書いた⁴⁾。

朴齊家と李德懋は優れた学者と文人として認められていたが、二人とも庶孽であったため、文科を合格しても政府はその能力や才能を十分に活用しようとはしなかった。実学では家系より能力や才能を重視し、「用人」、つまり能力のある人材を政府で活用することの重要性を政府に伝えようとし、実学者はそれを主張する文書を執筆していた。1777年に、国王は文科を合格した庶孽が上級の官職まで昇格できるよう下命したが、それが実行される前に国王は死去した。ところで、1553年以降、庶孽は文科より朴齊家のような武科で数多くが合格し、政府で活躍していた。しかし、昇格した庶孽の人数、そしてどの官位まで昇格したのか、詳しく確認できないが、十八世紀後半にはそれほど数ではなかったと思われる。そして1776年に即位された国王の正祖が若いため、故国王の英祖の命令をあまり実現できなかったのではないかと思われる⁵⁾。

朴趾源は『両班伝』のなかで両班文化を商人を通じて風刺したが、同時に両班の庶孽に対する態度や偏見を批判していたと思われる。朴齊家や李德懋のような人格と学問に優れた庶孽は、家系ではなく教養、能力や才能があれば、上級官職への昇格にふさわしいはずだと主張しているのであろう。庶孽ではあるが、両班文化の中に生まれ育てられ、教養を受けて北京へ行く国王の使節団に参加した人物は、朝鮮の適切な統治には欠かせない人物だと『両班伝』で伝えたかったのではないかと思われる。言い換えれば、国家が両班として認めるの

は、裕福な商人ではなく庶孽であると朴趾源は述べているのではないだろうか。

註

- 1) 朴趾源「兩班傳」『燕巖集』卷8別集、『韓国文集叢刊』第252、民族文化推進会、2000年12月。
- 2) 朴趾源、尹学準訳「小説「兩班伝」「虎叱」「許生伝」」『異文化』（法政大学国際文化学部）第3号、2002年、287-288頁。
- 3) Martina Deuchler, “‘Heaven Does Not Discriminate’: A Study of Secondary Sons in Chosŏn Korea,” *The Journal of Korean Studies* vol. 6, (1988-1989), 134-140.
- 4) 庶孽の文科登科に関しては、Kyung Moon Hwang, *Beyond Birth: Social Status in the Emergence of Modern Korea*, (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2004), 225-228、を参照されたい。
- 5) Hwang, *Beyond Birth*, 226.